

「井伊家文書」から見えてくる 西本願寺初期「学寮」の諸相

平田 厚志

彦根城博物館所蔵の「井伊家文書」のなかの『浄土真宗異義相論』は、龍谷大学草創期「学寮」時代（幕藩制前期の承応・明暦期）に勃発した、西本願寺教団内の一大事件（月感・西吟法論次第、本願寺良如・興正寺准秀出入一件）の経緯を詳細に伝える貴重な史料群である。この事件は幕府の裁定に持ち込まれることになったが、その吟味・裁定に当たったのが当時彦根藩主で、幕閣の中枢（承応元年、将軍補佐を命ぜられた）にあった井伊直孝であった。直孝をキー・マンとする事件関係者（主として直孝と良如・准秀）の往復書簡類からなる本史料群を読み解くことによって、承応・明暦期に直面していた西本願寺教団の教学的・教団的課題を解明する重要な手がかりを得ることができると思う。

本報告では、この「文書」から見えてくる龍谷大学初期「学寮」時代の学問的傾向の特徴の一端（後生願いの退潮と現実主義的な思惟の胚胎という新思潮が台頭してきた近世初期に生きた人々の意識状況を敏感に察知して、後生往生を標榜するそれまでの伝統的真宗教学を否定し、現実社会への対応と「人心」の把握といった新時代状況に応える教学の構築をめざす）を指摘したが、それはとりもなおさず、幕藩制前期における幕藩領主権力の「学問」への関心・課題（①「公」の階層的秩序を成立せしめること、②農民の「心」の直接的掌握の緊急性→①②の課題を克服するための学問の修得こそ、幕藩領主権力には不可欠であった）とほぼ一致することから、初期「学寮」時代の教学的課題は、幕藩領主権力の学問的関心・課題を踏まえたうえで、西本願寺教団の現実的（世俗的）対応でもあったことを確認した。